**説教20240128ミカ6：1-8マタイ5：1-12「いかに幸いなことか」**

**この地上の国での生活の特徴と言うのは、全てに終わりがあるということです。私は別府に来て初めて聞いて、知ったのですが、この別府の温泉にも、終わるときがくる、お湯が沸いて出なくなる時が来るということが予想されています。私は温泉と言うのは永遠に沸き続けるものかと思っていましたが、そんなことはないんですね。温泉と同様に、私たち一人ひとりに与えられた命にも、この地上で終わるときが来ますし、大きく言えば、この地上全体、時間の流れなども終わるときが来るのです。そのように地上の物事が全て終わるその時のことを終末の時と言います。その終末の時には、イエスキリストが再びやって来られて、私たちは天の国へ入れられるのです。**

**地上の国と天の国とをつなげて、一つとされるのは、イエス・キリストご自身です。それで私たちは、「悔い改めなさい、天の国は近づいた」という声を聞き、イエス様を信じて歩み始めれば、キリストの道を通って、確実に、天の国へと導かれるのです。**

**それで天の国の特徴と言うのは、この地上の国と違って、全てに終わりがないということです。今日のマタイ福音書５章12節に、「喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。」という御言葉がありますが、この天の国の大きな喜びには終わりがないのです。今、有限の国であるこの地上の国で暮らしている私たちには、実は、永遠に終わることがない喜びなど、想像することも出来ないでしょう。ですから私たち人間だけでそれを作り出すことなど到底無理な話なのです。終わることがない永遠の大きな喜びと言うのは、イエス様から教えられる以外に私たちがそれを知る方法はないのです。**

**私たちは、この地上にいるときから、イエス様を知り、イエス様の「悔い改めなさい、天の国は近づいた」という御言葉を信じて、イエス様と共に歩まないと、天の国には入れないでしょう。全ての人を招いておられるイエス様を、全ての人が信じて歩み始められるよう祈ります。**

**御心が天に行われるように、地にも行われます様にと、イエス様は祈られましたが、今日は、天と地を一つとされるイエス様の御言葉を聞いて参りましょう。**

**今日のマタイ福音書には、イエス様と共に歩む人と、共に歩まない人の両方の人たちの姿が記されています。イエス様と共に歩む人と言うのは弟子たちです。そして共に歩まない人と言うのは群衆たちです。**

**マタイ福音書5章 1節**

**イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。**

**この短い一節の中に群衆たちと弟子たちとの振舞いの大きな違いが語られています。或いは、このとき、山に登ったイエス様から離れた人々は群衆となり、イエス様と共に山に登って、イエス様の近くに寄った人々は弟子となった、とも言えるでしょう。こんな風に、私たちにとっても、イエス様から離れるか、或いはイエス様に近寄るかの分岐点と言うのは、私たちの日常生活の至る処に設けられています。**

**実は、弟子たちも群衆たちもイエス様が山に登る前までは、イエス様に従っていたと聖書には記されています。それではこのとき弟子たちと群衆たちを分けたものは何だったのかをみていきましょう。**

**先ず群衆たちです。イエス様は群衆たちの様子を見ておられました。そしてその群衆たちを平野に置き去りにして山に登られたのでした。置き去りにしてと言うと何か薄情な気がしますので、イエス様は、このとき群衆たちと距離を置くために、山に登られたと言った方がいいかもしれません。ともかく、イエス様は群衆たちと別れたのでした。群衆たちにはいろいろなタイプがいたことでしょう。その時、イエス様は人々の間で、癒す人として評判になっていました。イエス様が人々のありとあらゆる病気をいやされたので、群衆たちの中には、快気祝いの祝宴を開いて大いに喜び踊って、喜び合った、のはいいのですが、それでイエス様のことはすっかり忘れてしまっていたという人達もいたことでしょう。この手の人たちは、当然、山に登っていくイエス様の姿などは見ていないでしょうし、大概、その喜びも冷めやすくて、すぐに落ち込んで、また新しい喜びのネタを捜し回るという人生を送りがちになることでしょう。**

**次にあらゆる病人をイエス様のところへ連れて来た群衆を見てみましょう。病人を抱えて、その病人の快方を祈り求める人々にとっては、癒す人としてのイエス様にお会いすることが、何よりの希望であります。ですから何が何でもイエス様にお会いして、病人を癒してもらいたいというのが、彼ら彼女らの願いなのです。この願いを誰一人、よくないこととして非難する人はいないでしょう。しかしここにも落とし穴が潜んでいます。彼ら彼女らも又、山に登っていくイエス様に従って行くことが出来ませんでした。それはなぜでしょか。それは彼ら彼女らがイエス様に対して、病人を癒して下さいということだけを熱心に祈り願ったので、他のことが見られなくなっていたということでしょう。つまり、彼ら彼女らにとっては、病人を癒してくれるイエス様は必要であったけれども、山に登っていくイエス様は必要ではなかったということです。ですから彼ら彼女らは山に登っていくイエス様を見送ったのでした。或いは、彼ら彼女らはあまりに熱心に、癒す人としてのイエス様を追い回していたので、イエス様が山に登って行かれる時には、疲れ果てて目覚めておられずに、眠っていたのかも知れません。ともかく、これらの群衆たちも、この時イエス様から離れたのでした。**

**それでは弟子たちはどうでしょうか。弟子たちはこの時、山に登っていくイエス様の後ろに静かに従ったのではないでしょうか。弟子たちにとってはイエス様が評判の人物かどうかなどは、どうでも良いことだったでしょう。弟子たちはただイエス様に従って歩いたのでした。この時の弟子たちの様子を言い当てる、うまい表現が思い浮かびませんので、今日のミカ書から引用します。**

**ミカ書6章 8節**

**人よ、何が善であり／主が何をお前に求めておられるかは／お前に告げられている。正義を行い、慈しみを愛し／へりくだって神と共に歩むこと、これである。**

**つまり、この時、弟子たちはへりくだってイエス様と共に歩んでいたのではないでしょうか。そして、へりくだって共に歩んだ弟子たちは、イエス様から告げられる御言葉を聞くためにイエス様の近くに寄って来たのであります。**

**イエス様と共に歩んでいく、ということはいつもいつもイエス様の御言葉を聞いて、その御言葉に恵まれ励まされ教えられて人生を送っていくということです。そして福音書において、はじめてイエス様が口を開いて御言葉を弟子たちに教えはじめられたのが、この大切な山上の説教なのです。**

**イエス様と言うのは、人間でもありかつ神様でもおありになるので、私たち人間もイエス様に近づけば近づくほど、その御言葉は聞き届けられ心に響くものとなるでしょう。**

**今日の箇所には、８つの幸いが記されています。そしてこの８つの幸いはだんだんと人としてのイエス様の言葉から、神さまとしてのイエス様の言葉へと高まっていくようです。**

**今日はわかり易い幸い項目だけを取り上げますが、先ず、二つ目に「悲しむ者は幸いである」と、イエス様は教えられました。「悲しむ者は幸いである」これは実に人間的な励ましの言葉です。私たちがこの有限の地上の国で人生を渡っていくには、当然、喜びがありその後悲しみがあり、そして又喜びがあります。なぜならばこの地上では喜びにも悲しみにも終わりがあるからです。今日の交読詩編128編で、いかに幸いなことか、と歌われた家庭の幸せな姿も、時が来れば、必ず終わるときが来るのです。それで人間同士の関係でも、人が幸せな時は大概何を言っても幸せなのですが、問題は人が悲しんでいる時でしょう。悲しんでいる人を前にして、「悲しむ者は幸いである」と言えるのは、やはり愛情深く結びついている人同士ではないでしょうか。**

**そしてイエス様は、７つ目に「平和を実現する人々は、幸いである」と私たちに教えられました。この御言葉は、もうほとんど神様としてのイエス様の言葉として聞かれるのではないでしょうか。**

**私たちは知っています。この後、群衆ばかりでなく弟子たちも、十字架に付けられたイエス様のもとから離れ去っていきました。それから人々がイエス様のもとに呼び戻されたのは、ひとえに、神さまが成し遂げられた復活と言う出来事によるのです。今を生きる私たちにとっても十字架と言う苦難に遭われたイエス様に近づくことは、人の言葉による励ましでは、とても成し遂げられないことでしょう。この地上にあって、私たち人間は、ありのままでは、平和を作りだすどころか、争い合って逃げ回るという愚かな事しか出来ません。「平和を実現する人々は、幸いである」私たちは、神さまとしてのイエス様の御言葉の数々を聞くことによって、励まされ、イエス様の受けた苦難を共に味わい、それからやっと自らが平和を作りだす器として用いられるようになるのです。**

**そして最後に８つ目です。「義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。」私たちはこの御言葉を神の御言葉として聞くことでしょう。**

**私たちは、この地上で迫害を受けた時、居場所がなくなり、誰一人この地上で自分を味方してくれる人はいないと思うようになったりします。今、あちこちで行われているいじめなども迫害の一つに数えられるでしょう。迫害を受けている状況と言うのは一つの絶望的な状況です。しかし、この地上にあってはその絶望の状況にも終わりが必ず来るのです。この地上の出来事は容赦なく襲ってきますので、実際に、誰一人この地上で自分を味方してくれる人はいないという状況に陥ることもあるでしょう。しかし、そういう時にこそ「義のために迫害される人々は、幸いである」というイエス様の御言葉は、あなたに告げ知らされるのです。**

**この迫害される人として、この時イエス様の頭の中にあったのは、洗礼者ヨハネのことだったでしょう。洗礼者ヨハネは、ヘロデ大王に対しても容赦なく「悔い改めよ、天の国は近づいた」と宣べ伝えましたので、この時、大王によって捕らえられ牢屋に入れられていました。そして最後には、ヨハネは牢屋の中で首をはねられ獄死するのですが、彼は牢屋の中でも「義のために迫害される人々は、幸いである」というイエス様の御言葉を聞いていたことでしょう。そうすると、不思議なことに彼は牢屋の中でも決して孤独ではなく、牢屋を尋ねてくれる人からイエス様のことを伝え聞いて、何にも勝る生きる勇気を与えられたのでした。**

**この様にしてヨハネは、キリストと共に地上での生涯を終えましたが、天の国に入れられた彼は当然、永遠の大きな喜びの内に入れられたのでした。**

**人でありかつ神様であるイエス様は、今日見てきましたように、それぞれの人が今、置かれている状況に合わせて、その人と共に居て御言葉を聞かせて下さるお方です。私たちは、自分自身が高くなって立派になろうとするよりは、イエス様が高いところに登られるならば、そのイエス様に従って行く、と言う、あくまでイエス様と離れることがない、へりくだった歩みを共に最後まで続けて参りたいと願います。**

**祈り**

**今、私たちに容赦なく襲ってくる、この地上での試練をあなたはご存知です。どうか、私たちがその試練をひとつひとつ乗り越えられるように、いつも私たちのそばにいて、幸いなる御言葉を聞かせて下さい。**

**あなたに従って行く道は、高い山に登るときも、低い沼地をさすらう時も、常に幸いの道です。どうか私たちが、あなたからはぐれることなく、遂には永遠の大いなる喜びの国へと確実に導いて下さい。**